

教育を 読む

河合文化教育研究所
主任研究員 丹羽健夫

「新しき畳に寝たり宵の春」
女房と畳は新しいほどよいと
いう戯言ざれごとがあるが、これは漱石結婚
五年目の句である。

熊本は五高の教授時代の作品であるが、この熊本で漱石は六回も転居しておりこれは六回目の転居後のものである。本書の作者半藤一利は「畳は新しくて大の字になって寝ころがれて、気分がすこぶるよろしいが、そばにいるのはいぜんと古女房で、という諧謔かいぎやくがひそめられている」と皮肉っている。

「或夜夢めとに雛ひな娶りけり白い酒」
童話のような夢幻の句である。しかし半藤はここでも「ユング心理学の立場に立つ『夢事典』（白揚社刊）という本に、夢のなかで雛のような人形に何かしているとしたならば、それはその人の幼いころ誰かに、したこと、したかったができなかったこととつながりがある、と書いてあ

った」とまた皮肉っている。

「董程すみれな小さき人に生れたし」

半藤は評する。「のちに文学博士号を文部省がおしつけてきたとき、『これまでずっとただの夏目ながして生きてきたし、これからもただの夏目ながして生きていくから』と辞退した漱石の姿勢にそのまま通じている」と句に表れた漱石の清廉さを讃えている。

「菜の花の中に糞ふんひる飛脚ていせつ哉」
天真爛漫。

A
BOOK
REVIEW

『漱石俳句を愉しむ』

半藤一利著 PHP 新書 本体 660 円+税



「枕あした辺や星別れんとする晨」

半藤の評。『『内君の病を看護して』と前書きにある。新妻が病気になった、それを看護してとうとう朝を迎えた。それはまた七夕の、彦星と織姫とが別れねばならないときであった』と漱石の不安を指摘する。漱石も人の子である。

漱石の百数十句が楽しめる好冊子である。

また野球をやった漱石、早稲田大学対一高の野球観戦記を書いている漱石など意外な面白い漱石にも触れられている。